

# 「ええ」の機能についての一考察

—「はい」との比較を通して—

二宮 理佳・金山 泰子

## [要旨]

本稿では、「ええ」の持つ待遇表現の機能について考察する。

先行研究（北川 1973、日向 1980）では「はい」は「認知」、「ええ」は「同意」の機能であるとする。この基本的な違いを踏まえ、「はい」のみ使える文例、「はい」「ええ」が共に使用可能な文例について分析し、「はい」との比較を通して「ええ」の機能について考察した。

その結果、「はい」「ええ」の使い分けには話者が共有する情報の度合いが深く関与していることが分かった。共有する情報の度合いは話者間の関係を決定づけ、親疎・待遇関係へと密接に関わっていると考えられる。「ええ」を使うためには話者間での情報の共有が前提となる。情報の共有がなければ同意することはできない。また同意表明のためには相手の発話内容を評価・判断する過程を経なければならない。この為「ええ」によって相手との距離が縮まり同等感が出る。従って「ええ」は自己の主張・感情を積極的に表明する応答であり、「ええ」での応答は話者間の情報共有を表明し、相手に対し自らを同等な立場に位置づけると考えられる。故に不適切に「ええ」を使えば親近感・同等感を超えて相手に失礼な印象を与える可能性もある。よって、このような相違点について、適宜、現場の指導に織り込んでいくことも有意だと考えられる。

## [キーワード]

情報 共有 格差 距離 待遇表現

### 1. はじめに

本稿では「はい」との比較を通して「ええ」の機能について考察する。「はい」「ええ」の使い分けについて先行研究をもとに再整理を試み、「ええ」の機能、効果についてさらに分析・考察をすすめる。また、日本語教育の現場における「ええ」「はい」の使い分けの指導についても検討する。

「はい」「ええ」という表現は初級において早い時期に初出しているが、テキストにおいては「はい」「ええ」とともに「YES」の意味を表し、「ええ」は「はい」よりややくだけた表現である、といった程度にしか説明されていない（1）。しかし「はい」「ええ」が常に置き換え可能ではなく、また単なる丁寧さだけの違いではないということは先行研究からも明らかである。だが、「はい」「ええ」を状況や対話場面で意識的に使い分けられる学生は中上級になんて稀だと思われる。学習者のレベルが上がるにつれ、社会との関りの濃度や、異国における自己のアイデンティティ確立の重要性は増し、それと共に適切な言語表現の使い分けの重要度も増してくる。殊に「はい」「ええ」といった応答表現は、コミュニケーションにおいて極めて頻度の高い言葉である。従つて、日本語教育の現場においても「はい」「ええ」の使い分けについて適宜簡潔に説明することによって、早い時期からその相違点を意識させることは有意だと考えられる。

## 2. 先行研究と本稿との関わり

### 2-1. 待遇表現の側面から

「はい」「ええ」に限らず、我々は、相手との関係、状況、場面、自分の立場、話題等に応じてさまざまな表現の使い分けを行っている（杉戸 1983）。このような言葉の使い分けが広く「待遇表現」と言われている（平林・浜 1988）。我々は様々な観点から総合的に適切と判断した言語表現を選びとっているのである。水谷（1989）はこのような待遇表現を使用する目的は良き人間関係の樹立と維持にあるとしている。

言葉の使い分けは相手との関係を成立させるだけではなく、話者自身の立場をも決定づけると考えられる。阪本（2001）は、言葉の持つメタコミュニケーション・レベル（2）の重要性に触れ、言葉遣いは「個性とアイデンティティの表明」（36）であり、相手との関係を規定する「関係生成的な側面」（37）を持つことを指摘している。ことに、身分制度が崩壊し序列意識の希薄になった現代社会にあって、言葉遣いは社会から規定されるものではなく、その表現を選択した発話者自身の個性やアイデンティティの表明となる傾向が強くなっていると阪本は指摘する。

「ええ」もまた、他者との関係を作り出し、自己のアイデンティティを表明する言葉使いの一つと言えるのではないか。本稿では、このような視点から「ええ」の持つ待遇表現としての機能について考察する。

### 2-2. 「はい」「ええ」について

「はい」「ええ」の違いを考察した研究としては、北川（1977）、日向（1980）がある。北川（1977）は、「はい」の本質的な意味は「承諾・肯定」ではないとした上で、「はい」「ええ」の違いについて次のように定義している。「はい」は「相手の発話がこちらにはっきりと届いたということを敬意をもって表明する」（66）に対し、「ええ」は「相手の言ったことに対して『自分もそのように思う』という自分の気持ちを表出す」（66）。北川はこの定義にもとづき、「自分もそう思う」と答えるのが不自然な場合には「ええ」で応答することはできないと説明している。

日向は、「はい」「ええ」における北川の定義を「認知応答」（はい）、「同意応答」（ええ）と名づけ、先行文を細分化しさらなる考察を試みている。その中で、「はい」は「どうぞ」や「さあ」に通じる積極的な機能を果たし、談話場面の設立・維持に関与する一方で、「ええ」にはそのような機能はないとしている。また話者同士が同じ利害関係の立場にあり、談話場面を共有する場合や共通の現象を話題にしているときは、同意応答あるいは共鳴応答としての「ええ」が適切であるとし、一方、情報伝達文および絶対的な命令文への応答には「はい」が現れやすいと指摘する。また聞き手の気持ち・意向にそって依頼するような発話および質問文に対する応答としては、「はい」「ええ」「うん」が相手・場面等に応じて待遇的に使い分けられると述べている。

McGloin（1997）は北川・日向の研究を踏まえた上で、「はい」の機能を“making the next move in an interaction”（14）（談話・場面を進行させる）、「ええ」の機能を“participant alignment”（14）（参加・協調）と説明している（3）。

富樫（2002）は、「はい」の本質を単なる情報獲得の標示としてではなく、情報処理を心的操作したということの標識として捉え、その機能を「提示された情報に対し、それに関連した半活性化情報が多数呼び出されたことを示す」（147）と定義している（4）。

### 3. 考察の対象と方法

本稿では、下降のイントネーションではっきり言い切る場合の「はい」「ええ」を考察対象とする。したがって、ためらい・疑問・考え中であることのサインとなる「はい」「ええ」は対象とせず、発話後のポーズも考察には入れないものとする。

まず先行研究をもとに、「はい」「ええ」の違いについて情報量という点から分析を試みる。富樫（2002）は情報処理という観点から「はい」「うん」の違いを説明しているが、「はい」「ええ」の使い分けにおいても、話者間の情報の共有の度合いが大きく関与していると思われる。ここで述べる「話者間の情報の共有」とは、話し手（情報提供者）が提供する情報が、聞き手にとって既知であるという意味である。聞き手にとって既知の部分が多いほど情報の共有の度合いは高まり、逆に未知の部分が多いほど情報の共有の度合いは低くなる。情報の共有の度合いは、話者間の関係を決定づけるものであり、親疎・待遇関係へと密接に関わっていると考えられる。

本稿では、先行研究から明らかにされた「はい」「ええ」の基本的な違いをふまえた上で、話者が共有する情報という点に着目し、「はい」「ええ」の違いを明らかにする。さらに共有する情報の度合いの違いによる「はい」「ええ」の使い分けが、待遇表現としての機能にどのように作用しているかについて考察する。

方法としては、まず「はい」しか使えない文例からその共通項を抽出することにより、「ええ」の機能を明らかにする。さらに「はい」「ええ」が共に使用可能な文例をとりあげ、そのニュアンスの違いについて見ていく。

尚、文例については、日向、北川、日本語表現辞典から引用し、（ ）にページ数を示した。特に明記しないものは作例である。

### 4. 「はい」「ええ」の分析

#### 4-1. 「はい」のみが使える文例について（1）

「ええ」の機能を明らかにするために、まず、「ええ」は使えず「はい」のみが使える例について検討する。先行文との関わりから考察すると、「はい」しか使えない例は①先行文がない場合、②先行文が呼びかけ語からのみ成り立つ場合の2例である。

##### ① 先行文がない場合

例1 (A : \_\_\_\_\_)

B : はい、おみやげ。 (日向 220)

上記のような文例について日向は、「はい」は「どうぞ」や「さあ」に通じる積極的な機能を果たし、談話場面の設立・維持に関与する一方で、「ええ」にはこうした機能はないと指摘する。北川は、上記のように「自分もそう思う」と答えるのが不自然な場合には「ええ」は使えないとしている。富樫はこのように先行文を持たない「はい」の機能について、「これから情報が現れることの予告的な提示」(141) とする。

つまり「はい」は先行文を必要とせず、情報を持たない相手に対して一方的に情報を提示するこ

とができる。言い換えれば話者が共有する情報の度合いは低い。すなわち「情報の受け取り手」対「情報の提供者」という関係が成立する。

これに対し、「ええ」にはこのような一方的に情報を提示する機能はない。「ええ」はあくまでも発話、つまり、何らかの情報に対する応答として現れる。

② 先行文が呼びかけ語からのみ成り立つ場合

例2 A：山田くん。

B：はい。 (日本語文型辞典 490)

例3 A：(訪問者) すみません。

B：(事務員) はい。 (日向 226)

日本語文型辞典では、上記の例について、呼びかけや出席をとるために名前を呼ばれたときなどの応答として、「はい」は使われるが「ええ」は使わないとしている。日向（1989）は上記の例に加え、「あのう」「もしもし」などの言語表現の他、ドアをノックする音なども挙げ、これらの呼びかけ表現に対しては通常「はい」で応答し、「ええ」は使われないとしている。日向はこれを「ええ」には談話場面の成立に関与するような積極的機能がないためと説明している（226）。北川（1970）は同様の例について「自分もそう思う」と言えないという点から説明している。

「ええ」が使えない呼びかけ表現に共通して言えることは、呼びかけによって談話を設立しようとしてはいるが、「情報」と言えるほどの内容を伴っていない点である。つまり話者間の情報の共有はないと言える。

しかしながら、「すみません」「あのう」の後に「ちょっと伺いたいんですけど」と言葉を足せば「ええ」も用いることができるようになるのではないか。この場合、「伺ってもいいか」という許可を求める意味合いも併せ持つようになるため、Aの発話にはBが反応を返すだけの内容がある。つまり情報の共有の度合いが高まる。故に「ええ」での応答が可能になると考えられる。

4-2：「はい」のみが使える文例（2）（「ええ」の可能性がゼロではないが不自然な場合）

次に、基本的には「はい」で応答するのが一般的または自然と考えられるが、条件によっては「ええ」も可能である場合について検討する。そのように考えられるのは、①先行文が情報を提示する平叙文の場合、②先行文が命令文の場合、③先行文が疑問詞を伴う疑問文で、聞き手に情報を求める場合の3例である。

① 先行文が情報を提示する平叙文の場合

例4 A（女子事務員）（部屋を出ていく際に）

「あのう、ちょっと郵便局まで行ってきます」

B（男子事務員）「はい」 (日向 223)

日向（1981）は、上記の例のような情報伝達文に対しては「ええ」で応答せず、話し手の情報を認知したとして「はい」で応答するのが一般的であるとしている（223）。

しかしながら、Aの「郵便局へ行く」という行為が日常化されたものであり、聞き手Bにとって予測しやすい状況であれば、「ええ」と応対することもさほど不自然ではないだろう。つまりAB間の情報の共有が高まれば、「ええ」の可能性もあると考えられる。

しかし、以下のような例では、やはり「はい」が自然である。

例5（スポーツセンターの若いインストラクターが年配の社会人の客に使い方を説明している）

A：このレバーを使うと、椅子の高さが調節できます。

B：はい。

B：？ええ。

AがBに対して使い方を説明する内容であり、AからBに一方的に情報が伝達するという状況である。ここでは情報提供者（A）、情報の受け取り手（B）という関係が固定されている。つまり、A・B間の情報の共有の度合いが低い。結果、「はい」が適切である。

教科書では一般的に「ええ」は「はい」より改まり度が低いと説明されている。しかし例5の設定では、Bは年齢的にも、また客という立場から見ても、明らかにAよりも目上にある。単なる改まり度の点から説明すれば「ええ」も使えるはずであるが、「はい」のほうが適切である。それは「ええ」を使うとBは既にAの提示した情報を知っているということになるからである。即ち新情報ではなく、既知の情報ということになってしまい。したがって、ここで「ええ」が使えないのは改まり度の問題ではなく、ABが共有する情報の度合いが低いからである。

## ② 先行文が命令文の場合

例6 A：ちょっと待ちな。

B：はい。 (日向 225)

日向（1979）は、命令文には聞き手にはっきり行動を求める命令的なものから、聞き手の行動に期待するような依頼文までいくつかの段階があり、上記のような絶対的に命令する発話の応答には「ええ」は表れにくく、聞き手の気持ち・意向にそって依頼するような発話（依頼文・勧誘文）には「はい」「ええ」「うん」が待遇差を伴い使い分けられる（225）と述べている。北川（1977）も、「ええ」を使うと自分に向けられた命令文に対し「自分もそう思います」という意味になってしまい、不自然だと説明している。

次の例を見られたい。

例7（教師が学生に向かって）

A：もっとしっかり勉強しなさい。

B：はい。

B：ええ。

このような場面で「ええ」で応答すると、「もっと勉強しなさい」という情報がBにとって既知の情報となり、結果として「ええ、私もそう思います」というニュアンスを伝えることになり、不適切であるばかりでなく場合によっては不遜な印象を与えることもある。

命令とは、上位者が下位者に対して、その行為の実行を強制するという機能であり、命令文とは聞き手にその要求を受け入れるかどうかに対する判断の余地を与えないほど強い強制力を持つものである（仁田 2003）。したがって命令文に対しては承諾応答の「はい」が適切である。一方「ええ」は同意表明の機能を持つ。同意に至るには評価・判断という過程が不可欠である。評価判断を下すということは、命令された内容の良し悪しを評価することであり、上位者対下位者という関係が成り立たなくなる。すなわち、二者の立場が近づき同等感が強まってしまうため、上記のような場面では不適切となる。

### ③先行文が疑問詞を伴う疑問文で、聞き手に情報を求める場合

例8 A：私のかばんはどこですか。

B：はい、あそこです。 (日向 224)

この「はい」は北川や日向の解釈によれば、相手の発話を受取ったという「認知応答」である。日向（1980）はこのような疑問詞を伴う質問文に「はい」に代わって「ええ」で応じるのは一般的でないと述べる。

情報の面から考察すると、Bが所有する情報は、Aと比べると絶対的に多く、Aは情報を得る、Bは与えるという役割がはっきりしている。そのため「はい」が使われると考えられる。特に以下の例のように情報を提供することが職業的に求められる場合は「はい」による応答が自然である。これは情報の与え手・受け手という役割が更に固定されるからだと考えられる。

例9（映画館の窓口の従業員（B）が客（A）に上演時間の説明をしている）

A ○○のlate showは何時からですか？

B はい、8時からです。

B×ええ、8時からです。

その他の疑問詞を伴う疑問文（何・だれ・どこ等）でも、「はい」が使用できるのは、上記のようない方方が説明（情報）を与え、もう一方が受取るという状況の例である。しかし、「ええ」は情報を持たない発話に対する応答としては使えないため、不自然であると考えられる。だが、関係が近くなり情報も共有する状況であれば、疑問詞を伴う疑問文に対しても「ええ」で応答することが可能になってくるのではないか。このような例については次項で論じる。また日向（1980）も指摘しているように、「どう」「いかが」などの疑問詞を伴う場合には「ええ」が使える。このタイプ

の疑問文は「情報提示」を求めるというより「意見」「意向」を問うものであるからと考えられる。

以上、北川・日向の先行研究を踏まえた分析から抽出される「ええ」の機能についてまとめる  
と、次のことが言えるのではないだろうか。

1. 「ええ」を使う場合、話者間の情報の共有の度合いが高い。
2. 「ええ」で応答することが可能な先行文は、同意を表明するのに充分な内容・意見などを伴  
った情報でなければならない。

次項では「はい」「ええ」共に使用可能な文例の分析を通して両者のニュアンスの違いについて  
考察し、「ええ」の機能・効果についてさらに考えてみる。

#### 4-3. 「はい」「ええ」共に使用可能な文例について

「はい」「ええ」共に使用可能と考えられるのは、①先行文が真偽疑問文の場合、②先行文が「ね」  
を伴う文（確認文・感嘆文等）の場合、③先行文が疑問詞を伴う疑問文で、相手に意見を求めたり  
相談している場合の3例である。

##### ① 先行文が真偽疑問文の場合

例 10 A：掃除は終りましたか。

B：はい／ええ／うん。 (日向 224)

日向は、このような真偽疑問文に対する肯定応答としては、「はい」「ええ」「うん」のいずれも  
使え、相手・場面等により待遇的に使い分けられるとしている(224)。

北川(1977)はKuroda(1965)、Pope(1972)を引用しつつ次のように指摘している。真偽  
疑問文の答えの可能性はもともと二つしかなく、質疑者はその二つの可能性の中の一つをとり  
あげてこれはどうかと尋ねているのである。上記の例10にあてはめて言うなら、Aの質問は「掃  
除は終りましたか。終わりませんか。」という文の前半部分にあたり、応答者Bは「はい」と  
答えることにより「あなたが口にされたことは（口にされなかつたことに対比して）こちらには  
つきり届きました」という認知応答を表し、「ええ」と答えることにより「私もあなたが口にされ  
たように思っているのです」という同意応答を表すと解釈することができる。

この北川の解釈を踏まえて情報の点からさらに考えてみると、真偽疑問文の場合、疑問詞を伴  
う文に比べ、答えが二者選択にまで絞られているという点で、話者間における情報の共有度は増  
しており、同意を示すだけの内容を伴った発話にもなり得る。この理由により「ええ」の使用が  
可能となってくると考えられる。

では、次の文例における「はい」「ええ」のニュアンスの違いはどうだろうか。

例 11 A：本屋はこの階ですか。

B：はい、そうです。(デパートの従業員)

B：ええ、そうです。(通りがかりの人、知人)

Bがデパートの従業員であれば「はい」と応答するのが普通である。前出の北川も指摘するように「はい」は相手の言つたことを敬意を持って受け止めたという認知応答のサインであり、応答者自身の意見は何も表明していない。また前項で考察したように、「はい」は情報の提供者／情報の受け取り手という関係を固定させる機能があると思われる。特に情報提供が職業的に求められる場合は「はい」が自然である。

一方「ええ」は「同意応答」であり、単なる「情報の受け取り手」ではなく「情報の共有者」であり、さらに「同意」という自らの意見を表明している点において、相手に対して対等な関係を表示していると言える。言い換えれば、「ええ」を使うことは発話者と応答者の距離を縮め、話者間の関係を近づけることになる。Bが通りがかりの人であれば「ええ」がより一般的だと考えられるのは、「通りがかりの人同士」には待遇的な差を設定する必要がない、つまり同等という意識が働くからである。ただし、年齢差等から(AがBより明らかに年配である場合等)「はい」で応答する方が好みのケースも考えられる。

## ② 先行文が「ね」を伴う文(確認文・感嘆文等)の場合

例 12 A：今日はスペイン料理ですね。

B：はい／ええ／うん。 (日向 224)

例 13 A：きれいですね。

B：ええ、きれいですね。 (日向 222)

日向(1980)は上記のような「ね」を伴う感嘆文を先行文とする場面では、AB共に同じ情報を共有していることが前提となり、「ええ」が現れやすいと指摘し、確認文に対しては待遇的に「はい」「ええ」「うん」が使い分けられるとしている。また日向は、終助詞「ね」の機能について時枝の説を引用し、「ね」は聞き手との親しい関係のみにおいて許され、そのため「ね」を伴う先行文には「ええ」が現れやすいと説明している(223)。

このような場面で「はい」で応答した場合には、前述のように、相手の発話を敬意を持って受けとめたというサインになり、応答者自身の意見は何も表明されず、情報を共有しているという関係は成立しにくい。

## ③ 先行文が疑問詞を持つ疑問文で、相手に意見を求める場合

疑問詞を持つ疑問文には、(a) 単なる質問の場合と(b) 意見を求める相談したりしている場合とがある。前項の「客が従業員に映画の上映時間を聞いている」会話は(a)の例であり、この例では情報の共有がなく、情報提供者と情報の受け取り手という関係が固定されているため「ええ」は使はず、「はい」で応答するのが一般的であると考察した。しかし、(b)のような場合には話者間の情報の共有が前提となってくるため、「ええ」が使える。

次の例を見られたい。

例 14 (1 つのクラスをそれぞれ違うセクションで教えている 2 人の教師の会話例)

A : Bさん、明日の会話のクラス、何します？

B : はい／ええ、最初に少し復習をしてから入ろうかと思っています。

上記の例では、A と B は同じクラスを教えており、A が B に明日のクラスについて相談、あるいは意見をたずねているという設定である。同じクラスを教えている A と B が共有する情報が多いと言える。この場合「ええ」「はい」どちらで応答することも可能であるが、「ええ」を使用した場合の方が、より同等感が強まる。「はい」が相手の発話を敬意をもって受け止めているのに対し、「ええ」は自らの意見を表明しているからである。

以上の分析から、「はい」「ええ」の機能と効果は以下のようにまとめられる。

#### 「はい」の機能と効果

- ・相手の情報を、敬意を持って受取ったというサインを示す。
- ・情報提示の予告としてのサインとなりうる。
- ・話者同士が共有する情報に格差があり、「情報の提供者」・「受取り手」という関係を固定させる結果、話者間に距離が生じ、改まり度が増す。

#### 「ええ」の機能と効果

- ・相手に対する同意を示す。したがって先行文は、同意を示すのに充分な内容・意見を持った情報を伴うものでなければならない。
- ・話者同士が情報を共有することにより、話者間の距離を縮め、親近感・同等感を示す。

### 5. 「ええ」の機能についての考察

「はい」と「ええ」の違いには、話者間が共有する情報の度合いが深く関与している。共有の度合いが高いほど「ええ」の使用許容度は高まり、話者間の距離が近づいた結果として親近感・同等感を増すということが言えそうである。一般的に「ええ」が「はい」よりもくだけた表現であるとされているのは、この情報の共有がもたらす親近感・同等感というところから来ていると思われる。

ここで改めて「ええ」の持つ機能と効果を再検討してみたい。そもそも「ええ」が本来持つ「同意を示す」という意味はどういうことなのか。「同意する」という発話行為は、相手の発話内容について良いか悪いか（同意できるか否か）を判断するプロセスを経て、表出されるものであろう。つまり「ええ」という短い表現の中には、話者の判断に基づく相手への意見が表明されているのであって、単なる応答表現ではなく、非常に主体的かつ主張の強い表現であると言えるのではないだろうか。相手の発話を敬意を持って受け止める「はい」が自らの意見を伴わない受動的な表現であるのに対し、「ええ」は積極的に自己の考え方・スタンス・主張を前面に押し出すといえるのではないか。

## 6. まとめ

「ええ」での応答は、話者間に情報が共有されていることを表明し、相手に対し自らを同等な立場に位置づける。故に不適切に「ええ」を使えば、親近感・同等感を超えて相手に失礼な印象を与えることにもなりかねない危険性を孕んでいる。このような点についての説明を現場の指導に加えていくことも必要だろう。

例えば、教師の「田中さん、この間のレポート、私が朱を入れたところが全然直っていませんでしたよ。もう一度よく見直してください」という指導に対し、学生が「ええ」と応答するのは不適切である。命令・指示は相手の意見・意向を問うているわけではないため、応答者が同意するか否かを示す余地はないからである。場合によっては「ええ、わかっていますよ」というような意味合いになってしまう。

また「ええ」「はい」は同じ意味ではなく、「ええ」は「はい」よりややくだけた表現というだけでは説明しきれない。たとえば目上の者が目下に対して「～さんのペン、お借りしてもいいですか」と許可を求めた場合、「ええ、いいですよ」のほうが「はい、いいですよ」より、やわらかく丁寧な印象を与えるのではないだろうか。「はい」を使えば、許可を求める／許可を与えるという関係が固定されてしまい話者間に距離が生じてしまうが、「ええ」であれば、「(あなたがなさりたいことに)もちろん私も同意しますよ」というニュアンスを含むと同時に、「ええ」の持つ機能によって二者の関係をより近づけ、「許可」を与える側としての立場を下げる。結果として親近感と丁寧さが生じる。この点から考えてみても「ええ」は「はい」よりくだけた表現とは言い切れず、目上の人に対しては「はい」で応答すべきだといった指導だけでは不十分なことがわかる。

いくつかの初級教科書（1）を見たところ、「ええ」は「はい」より丁寧度が低いという説明や「ええ」は目上には使えないという説明以上に言及しているものはなかった。また「はい」「ええ」共に英訳は「YES」とのみ記されているものもあった。初級段階で微細な違いについて深入りすることは避けねばならないが、明確に違いを説明できるところや、明らかに「はい」「ええ」の一方が望ましいと考えられる場合には、説明を施した上で練習を行うことは有意だと思われる。

「はい」「ええ」は初級学習の早い段階で導入され、簡単に覚えられる表現であるだけに定着度も高く、言い換えれば間違った認識を持ったまま定着してしまう可能性がある。他の尊敬語や謙譲語は定着が困難な分、誤用運用した場合に、聞き手に対して「間違い」ということが伝わりやすい。だが「はい」「ええ」の適切な運用ということになると、間違いが微小すぎるために、間違いなのかどうかも聞き手に伝わりにくく、結果として無意識に不適切な自己表現をしている可能性がある。また「はい」「ええ」のどちらを使っても会話の展開そのものには大きな支障をきたすことはないため、その誤用は見落とされがちである。学習者が使い分けられるようになるためには、やはり現場での適切な説明が必要であろう。

水谷（1989）は、待遇表現の指導について次のように述べている。

待遇表現の指導というと、ごく初步の段階ではなく、中上級の問題だと感じている教師が多いかもしれない。しかし、それは語彙・構文の点で複雑な面の訓練を行う場合のことであつて、待遇表現の指導そのものは、学習段階の如何を問わないものであり、日本語教育の開始

時期が同時に待遇表現の開始時期であると考えられる（33）。

「はい」「ええ」は、初級テキストの第1課に現れる表現である。待遇表現指導の第一歩として、その使い分けの重要性は非常に高いと言えるだろう。

## 7. 今後の課題

本稿では「はい」との比較を通して待遇表現としての「ええ」の機能について指摘した。相づちは本稿の範疇に含めなかつたが、今後は「はい」「ええ」での相づちについても考察を進めていきたい。また異なる言語能力を持つ日本語学習者や母語話者の「はい」「ええ」使用の実態を比較分析する必要があると思われる。具体的には「はい」「ええ」使用の頻度・傾向及び、「はい」「ええ」の選択における意識を調査し、学習者・母語話者の「はい」「ええ」に関する認知と解釈を比較する。石田（2005）も指摘しているように日本人同士の相づちを学習者がどう認知し解釈しているかについての研究は少ない。また学習者自身の運用における意識における調査も十分なされているとは言えないため、以上の点を検討していくことは、教育現場での適切かつ効果的な指導を見出す上でも有効だと考えられる。

また、母語話者における「ええ」の習得状況についても調査を進めたい。例えば小学生などの子供が「ええ」を使うのは適切ではない。またディスカッション等の改まった場でも子供同士では「ええ」は使わない。一方「はい」は子供同士でも可能である。この点も「はい」「ええ」の違いだと考えられるが、子供は「はい」から先に習得し、ある年齢に達した後必要に応じて「ええ」を自然習得していくと推測される。では「ええ」は何歳ごろから習得されていく応答表現なのであろうか。この点に関しても今後、観察・調査が必要である。

さらに「はい」「ええ」の歴史的語義変遷についても考察を深めたい。北川は「はい」には「承諾・肯定」の意は本質的にはないのだと主張しているが、その論拠として森田（1973）の考証に基づく「はい」の歴史的推移を紹介している。「はい」の前身は不可解を表す声である「は」であり、近世になってから「納得・了解」を表す「はあ」「はい」に発展し、「承諾・肯定」の意味は二次的に派生したものだという。一方「ええ」は、もとは詠嘆・感動を表す感動詞「えい」であるという（森田 1996）。「角川最新古語辞典」（1983）では「えい」の語義の一つとして「驚いたり強く感動したりしたときに発する声（現代の「やあ」「まあ」「ええっ」）」（86）とある。本稿では、同意表明の機能を持つ「ええ」は、相手の発話内容を評価・判断した後、自己の主張・感情を積極的に表明していることを指摘した。認知応答である「はい」と比較すると、「ええ」の方が主張・感情が表出した応答であると言えよう。この点を踏まえ、語義変遷という視点から考察を進めることも今後の課題の一つとしたい。

## 注

- (1) 「文化初級日本語」「みんなの日本語」「げんき」「ようこそ」「ICU の日本語初級」「Situational Functional Japanese」「Japanese for Busy People」
- (2) 阪本は、メタコミュニケーション・レベルの重要性についてベイトソンに触れ、「言葉には文字通りの

情報を伝達する表示レベル（情報伝達のレベル）と、両者の関係性に関するメッセージを伝えるメタ・コミュニケーションレベルとがある」と説明している。

(3) 日本語訳は筆者による。

(4) 富樫は、「はい」「うん」が話し手自身の知識状態、話し手自身の心内における情報処理との密接な関わりをもっていることを指摘し、「はい」「うん」の本質を話し手自身が心内で行っている処理を標示するもの（心的操縦標識）としての機能と捉えている。また「反活性化情報」について次のように説明している。「ある談話のある時点において、活性化している情報には常に関連する半活性化情報が存在する。例えば、「太郎が学校に行った」という情報を（典型的には相手の発話から）提示されたとすると、「太郎」に関する情報、「学校」に関する情報、「学校に行く」という行動に関する情報、あるいは誰がいつ話したか等の発話状況に関する情報などを、経験的な知識から呼び出し、容易にアクセス可能な状態（半活性化の状態）にする。つまり活性情報からつながる半活性化情報が発話の瞬間瞬間に発生していると考えられる。」(144) 半活性化情報が多数呼び出されることを示す「はい」に対して、半活性化情報が少数しか呼び出されていないことを示すのが「うん」であり、聞き手側から見ると、この違いが「はい」「うん」の丁寧さへの違いへと派生的につながっていると主張している。

## 参考文献

- 石田浩二 (2005) 「ニュージーランド人日本語学習者の相づち「ええ」についての知識－母語話者と学習者の解釈の比較」『日本語研究』127号 pp. 1–10 日本語教育学会
- 北川千里 (1977) 「『はい』と『うん』」『日本語教育』33号 pp.65–72 日本語教育学会
- グループ・ジャマシイ (1998) 「教師と学習者のための日本語表現辞典」くろしお出版
- 国際基督教大学 (1996) 『ICU の日本語初級』講談社インターナショナル
- 阪本俊夫 (2001) 「現代の社会関係と敬語の可能性」『月刊言語』11月 pp.34–42 大修館
- 佐藤謙三・山田俊雄 (1983) 「角川最新古語辞典」p.86 角川書店
- 杉戸清樹 (1983) 「〈待遇表現〉気配りの言語行動」水谷修編 『話し言葉の表現3』 pp.129–152 筑摩書房
- スリーエーネットワーク (1998) 『みんなの日本語』スリーエーネットワーク
- 滝浦真人 (2001) 「〈敬意〉の綻びー敬語論とポライトネスと「敬意表現」」月刊『言語』30号 pp.26–33 大修館書店
- 辻村敏樹 (1989) 「待遇表現（特に敬語）と日本語教育」『日本語研究』69号 pp. 1–10 日本語教育学会
- 富樫純一 (2002) 「『はい』と『うん』の関係をめぐって」 定信利之編 『『うん』と『そう』の言語学』 pp.127–157 ひつじ書房
- 仁田義雄 (2003) 「現代日本語文法4 第8部モダリティ」日本語記述文法研究会編 くろしお出版
- 日向茂男 (1979) 「談話における「はい」と「ええ」の機能について」『国立国語研究所報告』65号 pp.215–229 国立国語研究所
- 平林周祐・浜由美子 (1988) 『敬語 外国人のための日本語 例文・問題シリーズ10』荒竹出版
- 文化学国語専門学校編 (1987) 『文化初級日本語』凡人社
- 水谷信子 (1983) 「あいづちと応答」 水谷修編 『話したことばの表現 講座日本語の表現3』 pp.37–44 筑摩書房

- 水谷信子（1989）「待遇表現指導の方法」『日本語研究』69号 pp.24-35 日本語教育学会
- 森田良行（1973）「感動詞の変遷」『接続詞・感動詞』品詞別日本文法講座6 pp.177-208 明治書院
- 森田良行（1996）「意味分析の方法－理論と実践－」ひつじ書房
- Association for Japanese-Language Teaching (1996) *Japanese for Busy People*
- Banno Eri, Ohno Yutaka, Sakane Yoko and Shinagawa Chikako (1996) *げんき An Integrated Course in Elementary Japanese* The Japan Times
- McGloin, Naomi H. (1991) *Hai and Ee : An Interactional Analysis.* *Japanese/Korean Linguistics.* Vol.7
- Tohsaku Yasu-Hiko (1994) *ようこそ An Invitation to Contemporary Japanese*
- Tsukuba Language Group (1995) *Situational Functional Japanese* Bonjinsya Kodansha International

## A study of the function of “ee”

—through a comparison with “hai”—

Rica NINOMIYA, Yasuko KANAYAMA

This paper examines the function of “ee” in terms of honorific expressions.

Precedent studies (Kitagawa 1973, Hinata 1980) define “hai” as “recognition response” and “ee” as “agreement response.” Based on this definition, this paper analyzes two dialogue patterns: dialogues in which only “hai” is used and those in which both “hai” and “ee” are used. Through this analysis, we examine the function of “ee” in comparison with that of “hai.”

As a result of the analysis, we found that the degree of shared information between speakers is crucially relevant in terms of deciding the usage of “hai” and “ee.” The degree of shared information determines the relationship and degree of formality between the speakers. In order to use “ee,” speakers must share information since it is not possible to express agreement without shared information. Furthermore, in order to express agreement, speakers must undergo the process of evaluation and judgment for what they hear. Therefore, the utterance of “ee” reduces the distance between speakers and, consequently, reveals a sense of equality. As a result, we conclude that the function of “ee” as a response that actively expresses the speaker’s opinion and feeling, enables the sharing of information between speakers, and places them in an equal position with respect to the other. An inappropriate usage of “ee” may lead to excessive closeness and equality, and may consequently give negative impressions. It is considered to be meaningful to incorporate these points into classroom teaching.